

人口問題研究所  
研究資料第三号

昭和二十三年八月一日

過剩人口理論の史的展望(その一)

シエモソアの人口論

厚生省人口問題研究所

鈴木

No 1

シス文ンデの人口論は、その進歩主義の集約的表現である。といふのは、人口問題は、特に労働者階級の富乏と多産に原因する過剰人口の問題として、資本主義の発展に伴ふその社会的暗黒面に注目した彼の経済学説の妥当性を傍証するべく一つの有力な中心的論点となすものであつたからである。古典経済学が彼に於いて一つの自己批判的転機を劃したつたに、人口論は、シス文ンデ以後にはじめて一つの有力な転換点に遭遇したといへるよゝいのである。

二

シス文ンデが古典学派及び自由主義の批判者として登場した十九世紀の初葉は、イギリスの産業革命とフランスの政治革命がその当然の帰過を歐洲各地に波及せしむるに急激な社会革命の時代であり、彼の生地スイス

亦亦その余波を忍ぶが如くこれにはゆかたかつた。そして封建制度と富頭改  
 治に反抗して漸くその生存権を闘ひつたスイスの近代小市民たちにとつては、  
 新しく抬頭し来たる資本の威力は却つて旧にまさる強大な彼等の暴力として  
 彼らの生活を脅かしはじめておいた。前門の虎を退けて後門に狼を宣へたとい  
 つたようは事情であつた。スイス小市民たちの此の苦惱は近代資本主義の  
 発展に伴小近代小市民階級の階級的苦悶に外ならず、この苦惱は近代資本主義の  
 の資本主義的先進者としてシスゲンがその思想的成熟期に自ら現しく、  
 見聞したイギリスに於いては、この新しい資本の暴力は更に特殊かつ深刻  
 な形相を呈してゐた。生産階級の飛躍的発展は却つて層級の恐慌  
 を穿つ、不富の四苦集無常道は却つて労働階級の窮乏をいよいよ深刻  
 するといふ、資本主義的生産に本質的矛盾が、こゝにはなまじくも眼  
 前の社会的苦悶として経験されてゐたのである。この社会的苦悶の因つて  
 来る経済をシスゲンが自由競争と生産の無制限な拡大に及びし、



口待の強性として注目すべきこと、近代人口の急激な増大が原因である。

すなわち、これにより人口が増える。

乍ら、この人口の急激な増大は、経済的発展に伴って人口増大を促進する。

密の中に採取したものが多く、その結果として、現存の資源の採取が

倍増とし、その結果として、資源の採取が倍増する。これは、人口の増

大により、空間的に行き渡ることができ、現存の資源の採取が倍増する。

資源の増大は、人口の増大に伴って、資源の採取が倍増する。これは、人口の増

大により、空間的に行き渡ることができ、現存の資源の採取が倍増する。

資源の増大は、人口の増大に伴って、資源の採取が倍増する。これは、人口の増

大により、空間的に行き渡ることができ、現存の資源の採取が倍増する。

資源の増大は、人口の増大に伴って、資源の採取が倍増する。これは、人口の増

大により、空間的に行き渡ることができ、現存の資源の採取が倍増する。

資源の増大は、人口の増大に伴って、資源の採取が倍増する。これは、人口の増

これは、人口の増大に伴って、資源の採取が倍増する。

消費と労働を無視して生産の無政府主義の大競争を其として、その  
のような観点から経済生活に對する、家畜の干涉の必要を説いたの  
が自由主義に對する批判者として、彼の主張の根子であつた。この消費、  
生産の自由主義的、家畜的に對する批判、抗議は、更にいふかへれば、  
人間自身の進歩と社会的富の増大に對する抗議であり、さう  
いふ意味で又、富を人間から奪はした古典主義の方法に對する抗議  
でもあつたので、かゝる人道的關心の再生と復讐とこそが経済情  
況の歴史上一特徴を刻してシスメン家の経済思想の主要の核とな  
つてゐたといへよう。

この抗議は古典主義に對する疑念の経済的表現としてシスメン  
家の批判者の立場を首肯せしむるに足るものであつたが、併し又、  
生産に對する生産力の無政府主義を畏怖した彼の生産力と小生産  
者たちの経済的立場を同時に反映してゐるものであつたことを

希望し進め。その必要でシスメンタリを小ブルジョア階級の  
イデオロギーの無機的代辯者とし、その経済思想も経済学的浪漫主義  
義として性格ブチレレーニンの所定は唯かに紫雲を得てをり、

そのような階級利益に拘束された経済的不徹底と矛盾とも論じに  
指摘し得ることは、小ブルジョア階級、小ブルジョアがその理論的自衛  
の場りどころとした階級社会場、いかにブルジョア階級の運命に於

つた小生産者階級を、亦く近代資本主義社会意識の母胎であるとして時に  
又その基座と互に脱交する存在を兼ねたゆえにその近代市民階級の一典  
型と考へることが出来る。それは言はば近代市民主義社会の

社会的基盤として、近代市民階級中からその場りどころであること  
考へることでもしよう。それは亦く近代ブルジョア階級の傳統を代表するもの  
いつとして、シスメンタリ思想の中心を形成するものから、近代人道

主義の精神に外延しないである。故に近代の社会倫理意識乃至近代社会

経済学に於ける

政策學派の思想的基盤と考へらるゝ所にも亦そこにあると、へい。人口問題が、特に労働者階級の窮乏と多産の問題として、その學問的關心の対象となり、その人口論が彼の經濟學說の集約的焦點として取り上げらるゝに到つた理由も亦そこにあると考へらるゝ。

マルサースの人口論は当時の英吉利の貧民問題、ひかへれば小農民及び手

工業者階級の急激なる没落過程と直接の社會的動因として、大陸に於けるマラ

ンス革命の進展に對する英吉利支配階級の恐怖と反動とをその思想的背景と

して生ずるものとして、大衆的窮乏の原因を過剰人口に求め、過剰人口の原因

を人間生来の過剰増殖傾向に求めるその理論的結構の自然主義的構成はかゝ

る階級的利害と表裏するものであつた。このマルサースの人口論が十九世紀を

通じて、或る意味では今日に到るまでその理論的權威を持續してゐる根本の

理由はかゝる資本主義社會の階級的構造がそのまゝ、持續し發展し深刻化して



いる虞にあるは、ソウまでもないが、併し、その問題の發展と深化とに伴つて人口問題が、広く近代市民階級一般の大衆的関心に觸れるものとなり、マルサスの人口論がかかると市民階級の利害に直接に答へるところのイデオロキとして受けつがれるに到つたことを見のがすことのできない事實である。と同時に、かゝる社會的背景の變動的推移に伴ひ、マルサスの人口論は、當然に、幾多の本質的な修正と補充とを、多く種々マルサスの名に於て、時々はマルサスへの反対主張として蒙らざるを得なかつたわけだ。シスモンディの人口論も、そのほ、恐らく、そのやうな發展軌化との最初の、且つ最も有力な転機をなすものであつたといつてよいのである。

そのやうな見地からシスモンディの人口論の第一の効績として、論ぐべきは、彼がマルサス人口論の自然主義的偏向に反対して、人口増殖の單なる可能性と其の現実の傾向とを區別し、現実の人口増加は常に必ず特定の「社會」

會的諸條件の下に於いてのみ實現されるものであることを強調せる点にある。従つて又、オニにマルサスに於いては寧ろなほ經濟學の外部にあつて經濟現象が外部より働きかけ之を規制するところのものと考えらるべき人口増加は、ミスモンデイに於いては人間の社會經濟的行動の中に於いて規制せらるべきものとして完全に經濟學的理論体系の中に取り入れらるべきものといはゞ人間の合理的活動の中に攝取せらるべきものとなつた点を特記せねばならぬ。人口増加は完全に所得によつて規制せられるとする彼の主張はその集約的を根本命題で、マンバルトが彼を「經濟主義的人口理論」の典型的なる一代表者として挙げているのはさういふ意味で肯綮を得たるものといへよう。その他人口論がマルサスに於ける如き農業理論的偏向を捨て、全社會經濟的諸條件を媒介として考察するに到つたことは、人口増加に於ける特定の社會制度の效果に対する関心等と共に、ミスモンデイの人口論の特性として挙ぐべき當然の帰趨といつてよく、近代人口學說史の發展に寄与するところ決して尠

年併シスモンデイの人口論の最大の特徴は單に人口現象を經濟學的考察  
 の中に攝取したるだけなく、寧ろ之によつて現存經濟秩序の批判との傍証と  
 し、古典經濟學への抗議の中心的な論據とした處にある。といふのは、右の  
 如く、原則的には所得が人口を規制すると考へらるるにも拘らず、現實の事  
 實は寧ろ之とは反對に、窮乏せる勞働者階級の多産と、之に伴ふさま／＼の  
 社會的害悪とが与へらるる赤裸の事實であつた。この事實は、併し乍ら、  
 シスモンデイによつては、決して彼の原則を否定するものではなく、寧ろ資  
 本主義社會に於ける自由競争とこの無政府的な生産方法との幣害を物語るも  
 ので、自らその正當なる所得によつてその子孫の数を調節し得ないやうな社  
 會的見逃しの欠乏、乃至はかゝる産見数の自制を行はしめるに足る市民的教  
 養をさへも衰はせるところの極端なる貧困と窮乏とところが新生勞働者階級の  
 多産の原因に外ないと彼は考へるのである。それは畢竟、國民所得の分配に

於ける不均衡乃至は不公正を物語るわけ、経済學的省察の中に攝取せら  
れ、人口問題はこゝに於いては却つて現存経済秩序に対する彼の批判的態度  
の積杆となるに到つてゐる。それは又、別の言葉を以つていひか  
へるならば、資本主義的過剰人口の必然性を指摘したもので、過剰人口が窮  
乏を生むといふマルサスの命題は、こゝでは逆に窮乏こそが過剰人口の原因  
であるといふ反對命題にまで転廻せらる。所謂「経済主義的」人口理論は  
更にそれを越えて、広く社會史觀的展望にまで反省せられてゐるわけだ。それ  
が彼の経済思想に於ける社會思想的傾向と表裏一体をなすものであることは  
いふまでもない。

四

乍併、現存秩序に対するシスモンディの批判着的態度は、さりとて社會主  
義的方向へ發展することなく、當時のサン・シモン又はオーエン等の社會主義  
的主張には彼は嫌厭の情を承してゐる。その裏あぐまでも個人主義的、近代

小市民的立場を確守して譲らなかつたわけで、例へばその人口論中、狹隘な市場関係の中で正確なる見透しの下に生産し生活する小生産者たちが自らその子孫の数を自己の所得に適応させることによつて過剰人口の杞憂から解放されてゐることを強調してゐるかは右の如き彼の思想的立場を物語つて遣憾ないものといへよう。それは現存社会の現実の進歩発展の方向に対しては或は保守的、更には反動的な立場を固守するものともいつてよいが、併し又前にも言及せる如く、かような小市民的生活態度を広く近代資本主義発展の社会的基盤たる市民階級一般の生活理想を最も典型的に代表するものと考へるならば、我々は之に直接に支配階級の利害に与へるものでもなく、さうして社会主義的反命題にも逆転しない、一個の典型的なる近代的人口理論を見るところで、且つ又之にシスモンの人口論の最も傾聴すべく又玩味すべき思想的核心理念はあるといへようかと思ふ。シスモンの未だ知らなかつた十九世紀末葉以降の出生率或は負可変率の減少の事

長産業制限が労働階級の中にも一般化し普及したことを示している。か  
 此は労働者階級が同時に小市民的生活水準と教養とにまで向上し訓育せられ  
 つ、あるとを物語る。さういふ意味でモンテイの人口論は今日の我々  
 にとつても非常に再査し再吟味すべき当初の論題に属しているといつてよく  
 可つその理論の眞實も、又その限界も、このような現実の歴史的発展傾向へ  
 の展望下にかゝる社会階級の背景そのものを分析することによつて判定せら  
 れねばならぬ。

以下に翻約せるモンテイの人口論は、古典學派に対する批判者として  
 の彼の名著「經濟學新原理」一名人口との關係に於ける富にフッて一八一  
 九年の最後の一篇をなすもので、附録の「モンテイの經濟學說概要」と  
 共に林囑託の筆になるものである。

(本多 技官記)

我々は経済学は、特定の國家に於て、最多数の國民が政府の政策に依存する。最善の無不幸福を實現するに於て、最良の方法を研究する學と考へる。事實、中央政府によつて、常に三つの要素、即ち、福祉自身の増加と、全階級に之れを分配すること、が、今時に考慮されねばならぬ。政府は國富を全人に分ちうるよつて、國富の増殖を努め、且つ人口の増殖を促進し、これに、國富の分配にあつらしめるよう努力する。いづれにしても、政府の企図する所は、その國民の幸福の増加に他ならぬ。かくて、経済学は、主として福祉の學であり、窮極に於て人類の福祉に關するものか、此の科學の對象に属するものである。

人類は、最初唯一の家族であつたが、漸次倍加して地上に拡大した。地上の異なる地域に於て供給しうる生存手段に、人類が適応し得るためには長期にわたつて困難が續いた。我々は、かゝる自然の、行爲が新しく國土に於てくり送へる此れであるをみている。先住民なる地域に建設された殖民地、野蠻の文明に移行した國家に於ては、さうして快適に扶養せらるる数より、以上で、突然に多数の住民によつて、住まはれたものではなからぬ。地上が幾度かの收獲の役、不毛となり、その多くの地域が、交はる／＼、荒廢に歸す。此れ又漸次に再興した如く、此の如く演劇を増加人口に就ても、我々は、しばしばこのためである。我々は人口増加を以て、我々の法律と施す。





大部分は子供を生産するに好適な時期を逸してゐる。又大部分は成人に至る前には  
中止する。人間の行為は、その能力と意志とを収めかへては存しない。種族の増殖は意  
志の中にもその限界がある。若し社会を考察するならば、人間の家庭ともいふがたは  
かゝる決定する原因として、他のものは排除して次の二つに制限することが出来た。既  
結婚生活は、於ける愉悅と父権、或は其意情々人としての結婚は、かゝるものなり。  
慾望と欲念の討ち不安と利益主義とは、殊に生活を決心せしむる。人間は彼の愛情と  
性愛と彼自身を扶養する願望とを比較商量する各人自身に於て、その生活手段の願望  
は、社会福祉の爲に必要ならば、合構れり。父と存することとは、是を選擇するに決定的  
影響を與へる何人かあると堅くし。その愛情と、子供の愛情と、幸福を見去る人として  
また、その彼に全然依存する彼に幸福に置き度と慰みであらう。此は、何れも以上述に於  
いて、寧ろ一人か二人が他の人は與へる。



人がその地位を失つた不十分である事を知悉するが故に倍増しおける事を知りうる  
て得る故に人口は唯一の所得によつて決定される若し人口が此の關係を變更した  
とすればこれは父親達が自己の所得に就て欺かれたことによるわけであるが、  
が彼らで欺いたことによるわけである事、各国民は其の社会的施設を何と變更すること  
なくそれが扶養し得る人口に急す到達し得るものである各国民はその現状の然る如  
き限界をそれ其の分割されたるその所得を以て維持し得るだけの人口に急す到達したわけ  
である若し一時的であるならば或るヤミトヤ餓饉等が襲つて人口に大きな空隙を與へ  
此の事率に對する政府の施設策の期間が續くと富者に於ては補償財産によつてよ  
り富裕とせり貧者に於てはより少数の者がその移動を提議する事によつてよりより貧  
窮を獲得する事によつて所得は人口により大となるのであり或る時は恢復せる人間  
の生産力は急す廢棄されて地上の人間を根絶す如に見えた邊境の差跡を埋めつくすの  
に於ては僅少の才力で足りるかを見て驚くやあるのみ多くの國に於ける市民社会に於ては  
各黨派の各所得に對する支配權は長年與へられておる此の長年を其が結核して資金の  
只事は其年で其年に入るに若干の人は減少しおるのである四人口中の只幾分の息子

第三章 合の限界としての所得

所得を合の自然的且心的限界として考察するときは此の名辭は、各人が爲したる年々其の前期を超過して年々獲得せしむる之れを年々消費する事によつて何人も、より貪多をなす如く當の部分に専らしたるものなることとは或人にとっては、土地自身に価値及び、あらゆる耕作費用を控除したる残余の土地生産物を意味し、更に他人にとつては、流通資本自身及び、固定資本が与へたる助力の報酬を除いたる残余の流通資本の生産物が所得であり、更に第三の人は、固定資本に与へられたる此の補償を意味し、第四の人にとっては、若しそれが需要せらるるならば、その労働力自身も所得である。

所得が本質、或は、之れを當の他の部分と区別するところのものは、之れを完全に消費することによつても何れの欠損を生じざる處に在る。

彼の土地よりの地金及び満足せしむる、その利子及び収益によつて満足せる資本家及び商人、その賃銀を以て満足せる労働者は、各人が、その全所得を消費しても、國民を貧困とするものではない。然し土地所有者が、その土地を荒廢に任せしめ、又その森林を、規則正しく伐採せずして、之れを根絶せしめ、又補充を考へるとなくその家畜を屠殺し、或はその葡萄樹を過度に切り倒し、又その畑に与へる肥料を与へざる時は、彼は、その資本の(七)

一部分を所得として喰ひてゐる。今様に、商人は、その支払がその収益を超過するときは、或いは、今時とてハ

の利得を増大することなくして、その前払を減少せしめ或いはその負債を増加せしめるときは、彼の資本を破壊してゐるのである。この兩者とも、自己自身を損傷してゐるのみでなく、むしろ、彼と共にか或いは彼らによつて貧困化さ

してゐる。國民を犠牲とするものである。今によつて、その所得を完全に享受してゐる或は負債に接近する労働者

は、率、その所得を消費によつて、それが自己の健康及び、その労働力の維持に役立つようせしめるときは、その所得の

費用によつて、國民を貧困に導くものである。労働者たるものは、その再生産力は、彼が生命の中に在るものである。労働

者が彼の生命を過用し、或はそれを失ふときは、彼は、此は命の費用と交換するべき流動資本として価値を

作り出したる所り國民的資本を破壊するものである。他方、労働者が、此流動資本に対する交換に於て、

一個の生命がなくなると、次が生命を提供するものは、即ち、彼独りに對して定むる此負債額に對し、彼独りが働く代

りに次山か子供と共に労働するならば、彼の生命に内在する所の再生産力は低下する。或は、彼の労働が例へば

今に止むるとしても、その所得は競争によつて低下するものである。所得が減少する場合には労働者が働か

ず欲するものがは、其目的であつて、その労働を必要とするものを要求するものである。労働に對する需要は、或は、そのため苦

勞働に對する需要は、或は、そのため苦

猶し、その所得をうばはれるよりは労働階級である。若し土地所有者が、その財産を食食し、彼の土地を荒廃せしめたるよりは、労働又はその成果と交換するべく、彼の所得は減少する。彼が若しそれを償還するとき、彼は自ら爲に流動資本を調達するが、彼はそれを破壊したのであり、労働を最早や活動せしめないのである。彼はその財産の一部を賣却し、それは、彼は財産権利の一部との交換に於て、受取った所の資本を喰ふ盡すのである。然るときは、より少ない資本が労働との交換に残ることとなり、労働者は翌年、その爲に苦悶しなげればならぬ。及之、若し地主が、何かの偶然によつて、彼の所得を失ひ、節約となり、穀や霜の害を免れ、残余の物を以て、その生命を維持するならば、資本は減少するごとく、只、その廻轉速度が緩慢となる。けれど、富める者の消費が、その程速かに、それを補充しないから、労働の所要は、より少くなり、労働者はすでに、その年に於て苦悶するであらう。

地主と、資本家との所得が、その年に於て、完全に消費されるが、しかし資本は完全に手をつけられることなく残り、従つて、その価値及び、廻轉速度が喪失せらるるときは、而して、前と同時の労働を提供する労働者の数が増加するときは、此の場合も亦労働者は困難する。けれど、彼は、より少数の労働者に支拂はれるべく決意せらる、全一の資本に対して、その全供給労働を手取りればならぬから。

この論述によつて、貧民も富者同様所得を有すること、而して、彼等は、社会の他の階級より以上の所得を(+)人口数により多く適應せしむるにあらざること、しかし、此の所得の評価は、彼ら自身に依存してゐるのではなく、社会のより高い階級は、自らそのことに気が付かずして、此の所得を侵奪し、又破壊しようものがあることを知つたのである。今日の経済組織の最大の缺陷は、貧民が、労働に対する如何なる需要を期待してよいかを知らず、且つ、彼に、  
とて、労働力は、決して、一定の確實なる所得を意味し得ない点に存する。

労働者と大工場に集中し、工業の指導権は大資本家の手中に投せしめ、富の進歩は、此の点に於て、貧者に対し、全く不利なる影響を与へるのである。即ち、此の如く進歩は、貧しき者に対し、その爲に彼の働き、ある市場の需要に対する計算の可能性を彼から奪ひ去るのである。けれど、彼の労働を必要とする消費者に対し、彼は、全く、彼として相対して多量の労働者であるから、手工業者が、その小さな仕事場に於て働き、その生産物を近隣の都市に於て販賣する事を期待し得た間は、彼らは、自ら、その顧客を知つてゐたし、その所得が減少し、従つて、彼の労働に対する需要が全様に減少したときは、その顧客自体と会はずして速く之れを知つたのである。その当時は、不況困難な時代であり、一週間の半ばしか労働しなかつた労働者は、常に缺乏に苦しんだのである。彼は結婚、或ははその家族を増加しようなど考へることは出来なかつた。然し乍ら、大工場に於ける巨大なる資本が

工場労働者も多く、工場労働者を集中するようになって以来、この功首は、最早や、恐らくは、教壇を踏んで、  
生徒を消費者に置くは、何事も知らず、  
庭主が、突然解雇されるに至る瞬間迄――  
彼らは結婚し、或は他の家族を増やし、以後であらうか――  
彼らも消費者の困苦に就て、或は、労働者の  
の減退に就て何事も知らず、  
ある。

今時に小商人であり、製造業者であり、且つ手工業者である村の靴製造人は、  
注文せられない一足の靴も造らぬあつ  
う。若し彼の顧客が、その靴製造者の心を憂へようとするとき、  
彼が知らず、  
彼は、自分の子供の夫も四人持ち、

自分の手工業に育て上げられたものであつた、  
彼は、彼らにとっては、此の世で最早や仕事之余の  
ことを予見しているから。然し、もし彼、首飾に於て、  
一カ製靴工場を建設し、  
数年を通じて、毎週一足の靴を二  
十人の職人に作りせよとするならば、  
此等の職人は、  
勿論、  
此の小さな親方のそれには劣るが、  
然し、  
少くも共安全で

あり、  
その労働に於て、  
彼らに確實な所得を与へる所の、  
一個の地位を得たと考へるであらう。  
そして、  
此の保  
証のことも結婚するにあつた。しかし、  
若し、  
工場主の見込みが外れたり、  
破産したりして、  
その事業を中止しな

ければならぬならば、  
彼ら及びその家族は、  
彼ら自身も、  
錯誤はなほ、  
一カの錯誤の犠牲として滅びてしまつてあつた。  
小農地の所有者或は賃借人は、  
例へば、  
何に於て知識であるといへば、  
幾許の穀物と、  
葡萄酒と、  
大豆とが市に



場に於て取賣るべしと云ふを、全く精確に知らざるのである。若し、彼の近くに、より多くの住民が生活して居るならば、

彼の土地が運河や街道の通じ、河川より離れて居るならば、彼は、その土地を耕作しなすべからず、若し

その家族が増加してゐるならば、その取獲を如何に処置すべきかに深ふかりである。他方、若し彼の土地が

彼のすべての子供に仕事を提供し、余地なきならば、彼は、多くの子供を養ふとほしむておらうし、又子供も悉く結婚

し、始しようとはせざらざらう。若し、その大地主は大地主が、多量の労働を必要とする、費用多し、開墾をほ

じめたり、或は、数年間にわたる、ホップ草の栽培のために、又は土地の雑草を除去するために、或は葡萄畑のために廿

人の労働者を使用し、石ほり多量の労働者を必要とするならば、これらの労働者は、勿論小農民より幸福でないと

は、若し、若しその労働に於て、保証される所得を有すると信ずるであらう、彼等は此の所得は、彼らの爲に、又彼

らう子供が労働しうるに至れば、子供等に確保されるものと信ずるであらう、而して、彼らは此の保証に於て結倫する

ておらう。若し、地主が、その計畫に於て躊躇し、又は地主が、これ等すべての投資を回收し、それで家

畜を飼育し、又給人に何らの労働をも要せずして土地の提供してゐる、土地生産物を以て満足する方が有利であ

ることを見せしむれば、これらの労働者は、家族と共に、自らの責任を今に於ける錯誤の犠牲とて、或は

おらう。

富厚はその有物に参りし、彼等は此を程、その所得に就て因循し消費需要と均衡のとれ

れざる従つて、何れも生活資料を察見し得ざる人口の増加は益々多く參與する危険に

陥るのである。此の觀察はすでに古く言葉の中に取入れられ、ラテン語から近代語

に轉移されてあるのである。ローマ人は何れの所有物なくその代り他のありゆるもの

をもまして子供を多く持つようにならぬ *ad system generandam* 斯く子供を生むようにならぬ

り此は其のまづ口を夕日やと名付けたのである。所得は一方に於いて人口の制限を

行ふに不拘反對に僅小の所得は既に無制限の人口増加を刺激するに付いて人口は恐

ろく一驚と地すゝであらう、然し貧乏と富存とは異なり人々へ一様々に解散せしむる

個別的権益であることは忘るべからざらん。老人の慾望や習慣によつて又社会が彼ら

に課する所の義務によつて決定せしむるものである。この大り蓋し階層から降下すること

最早やその義務を承し得方なくなることと貧乏に墮落するの事である。或る男が結婚して

今迄は只横りに對して使途の決定せしめて居た所の所得を以て、以後多くの者を支へる

は此は度々及ぶとすればその為彼は困難な状態に置かれることとなり、或る時も彼は其の地

位に於いては何も欠く所は無いにせよ、社会人は此の如く変化に對して準備して居り

最果彼に對して令一の義務を課することはないから、しかし彼の所得が彼と其の子供

とを彼が今迄慣れしき地位に於いて支へるに不十分となる。

幾多の對象の爲に、彼らが、自らの爲に要求する以上のものを求めようとする傾向がある。彼らが年々人口の増えを爲すことを以て、満足する力がある。彼らの労働を必要とする市場を、まだかつて一度も探索しなかつた如く、子供が爲に、その労働市場を求めてやばうともしないものである。毎月ハースト兄弟を儲けず、日々饑餓に悩む所、不幸なる工場労働者は最早、自ら進んで、結婚を抑止しようとはしないのである。世間は、彼らをして、給料の支払はれると曜日以外の、遠く将来を考へないより、横取つたものである。此れ如くして、世間は、彼らの道徳性と、同情心とを磨滅せしめたのである。世間は彼らをして、余りにしばし、現在の苦痛を憐れみしめ、彼らの妻及び子供にかりかゝらう。将来の苦痛に殆んど、何らの恐怖を抱かぬようにせしめたのである。彼の妻も又、ハーストの学費を得るとき、又彼の子供らが、その幼時、病院から、或いは公共慈善団体からの助力を得、或は英國に於ける如く救貧院によつて、彼の教区によつて救はれる権利を彼に与へるときは、又彼の子供が大、セオの頃より、すでに儲けることをはじめるようになり、彼の所得は減らさるべからず、むしろ増加する如く思はれるときは、彼らの家族は、愛社会の負担を増加する毎に、愈々増加するのである。かくて、國民は、生活資料と何らの釣合を有せざる人口の重圧に陥へば至るのである。

第三章 土地の産出する生活資料の量は、人口の限界ではない

(六)

卓越せる精神と、中實に因する良心的研究とを結合し、燃ゆる如く人類愛によつて、その研究には凡て所が英  
國の哲學者マルサスは、はじめて、極悪の困苦と闘ひつゝある所の過剰人口が、それによる不良状態による世界生息  
を喚起したりであつた。彼は、野蠻と、文明とを問はず、新旧を問はず、あらゆる國民を對象に出した。而してそのあ  
らゆる國民に於て、生殖衝動と闘ひから發生し、且つそれが急激に増大するまゝには、社会の人口を絶滅する所の、苦惱と  
死滅とが存することを指摘した。一七八八年、彼は、人口に關する一著作を公にした。此の著作に於て、彼は、自らは先  
づ、すでに、プラトーン、アリストテレス、モシテスユート、フランクリン、サージョン、スチュアート、オー  
サーヤング及びケウセンテによつて、指摘せられたり、遂に何らの効果をも見出し得なかつた所の危險に關し、政  
治家の注意を喚起したのである。彼は、多数諸國民の世俗的及び教會的諸施設が、既に堪へ得ざる苦惱  
を更に増加せしむるに貢獻する事を指摘し、かく、經濟學の重要なる部門に全然新しい方向を与へたのである。  
漱次、版を重ねて、五版を出すに至つたが、彼は版を重ねる毎に、之れを補充し、改訂し、変更した。これ  
らは、彼の影響を普及拡大し、彼の体系に、非常な拡大を与へたのである。しかし、此の學説は、その完成  
せるものに於てすら正しきとはいへないのである。マルサスは、彼には、争ふ余地のないと考へられた所が、しかし、

平凡陳腐なる一つの前提に依拠してゐるのである。彼は之を検討しなからず、直ちに之を以つて推論の基礎としたのである。従つて此々が危険と信ずる種々の場合に因はれに至つたのである。我々は著者に対する尊敬を有するに不拘この意見を免れせず、そのより放置し得ないと思ふのである。

マルサスは一つの人はその国土の供給し得る食物の分によつて制限せられるといふ事を根本原理として樹立してゐる。此の前提はそれ地球全土の上に適用した場合のみはその食料の一部を外國から少しも輸入する可能性を有しない國に適用した場合のみ眞實であるにすぎないのである。すなはち外國貿易の存在は至るところこの事實に變化を與へる。しかし乍ら最も重大な事はこの前提はたゞ抽象的のみ眞實であり又経済學に適用しなへない種々のものであるといふ事である。いま知られてゐる人はその可能なる食料の限界に到達して是事々無く又恐らく是れに遠する事は無いであらう。

生活手段に對する要求を有するからゆゑ人は何れも其の土地から其の土地から要求する手段又は權利を所有し得るのみである。及んば法律が土地所有權を許したところの人は決して土地より供給し得るより多くゆる生活手段を要求する事には何れの興味をも有し得ないのである。何れの國に於いても土地は其の全時にその所得を増加する事なくして單に食料

の増進を促すといふ事のみを目的とするが如き耕作には反村して居り又此の爲に  
此に及らぬ事も或国の人口がより多くの生活手段を産出する事が不可能なる  
左が爲に是の増加停止を必要とする既に久しき以前此の増加停止は人口が此の  
生活手段を購入する事が不可能となつたに或るは生活手段生産に實現する爲に働  
く事が出来ぬ大く及らぬ事によつて實現されしに至る可いあり

又此の如きは人口は廿五年以上は増加する事が出来ず即ち樞何級級を以て増  
加する 又既に南壁せし此に在る土地をより多く生産的にする爲に投下せしむる所  
が漸くその生産物は僅小の量を加へるのみであり此の量に漸次その増加を減少せんと  
する傾向を有するものである 例へば田畑に於ける收穫が最初の二十五年間に二倍に及  
つたとすれば 次の二十五年間には率じてその増収を見てもさうし 其の次は年  
毎に次に倍と成るであらう即ち生活手段の増加は其の倍に於いて行なはれざる  
であらうかもしして二百年間に人口は八、九、果して此の如く増大するに不構 食物は八  
又、九、果して果して、如く増加するに及らぬのであるマルサス体系の基礎を及ら彼が全  
てを運んで絶へず引合に出して居るこの説明は此々がう見れば全體的な鬼は此  
に於て人は人口の可能的増加を何らの事情をも顧慮する事なく抽象的に考へるに即  
ち在る場所と益々不利となる事構の下に於いて行なはれし、ある動植物の實際の増殖  
と對比させてあるのであるしが、此の對比は許さるべきではな

相対的に云へば、植物の増加は、動物の場合よりはるかに無限に大なる幾何級数的増加をなすのである。而して、動物の夫れは、人間のより、はるかに無限に大なる幾何級数的増加をなすのである。即ち一粒の穀物は、第一年度に於て二十粒となり、第二年度に於て四百粒となり、第三年度に於て八千粒となり、第四年度に於ては、六万粒となる。然し、此の増加が、此の如く行はれる爲には、食料、即ち此の場合には土地が穀物として不足しないといふことが必要とされるのである。宛も、人間の場合に於けると同様である。

こゝの植物によつて生活する所は、動物の増加は、はるかに幾何級数的なものである。羊は、四年間に二倍となり、八年間に四倍となる。即ち、それらは、四年間毎に倍加するから、 $4 \times 8 / 32$  という数字となる。即ち、羊の数は、二十四年間に、マルサス説に従へば、人間がまだ完全に存在してゐる間に、すでに64対1の割合となるのである。

然し乍ら、此の倍加力能りは、植物に於ても、動物に於ても、又人間に於ても全株に甚だ強いものである。然し、現実の、有効力能りは、三者すべてに於ても、人間の意志によつて限界づけられるのである。即ち、現在の経済組織のもとに於ては、無差別に各人の意志によつて制限されるのである。土地の一部が、米耕作のみ、である間は、地主は、植物の倍加力能り、動物に於ても、或いは之れを停止せざるかを決定する主人である。植物が動物

によつて完全に喰ひつくさぬ間は、此の動物が倍加力を活動させるか、圧迫するかを決定する主人がある。地主は、彼に土地の生産物を要求する人間が、その交換に於て、彼に所得を提供しないならば、彼は、前者或いは後者を抑止するであらう。収入なき耕作又は牧畜を中止する。

人類の歴史を考察するならば、各時代、各場面に於て、常に人間の意志が、或いは、或るべく人々は主が、御ら人間が服従し、その意志の表白である所の立止か、生活手段の増加を妨げ、従つて又、人間の増加を妨げた唯一のものであることを発見するのである。

我々は、屢々、その労働に対して何らの報酬をも得ず或いは、少く共、十分なる賃銀を与へず此等の不幸なる労働者を許す。彼らが、力盡きて、餓へ、死滅してゆくを許すのである。しかるに、何れの国に於ても包圍せられたる都市の住民或いは、難破に陥つた船の乗員が、それら以て満足しなげればならぬか如く僅少な食物量に、人間が制限せられてゐるといふ事を、おぼろげに知ることがある。又、收穫不良の結果として、多くより多く生産し得ない爲に、生存せる人間を豊かに養ふに必要とするよりも少き食物しか無かつたといふ例をおぼろげに知ることがある。人類が、窮乏の結果として、或いは、十分なる賃銀の缺如すため、労働階級に於て、著るしく減小しつゝある瞬間に於てすら、かゝる例をおぼろげに知ることがある。



す。又我々は、新し 穀物を、土地から、需要に比例して生産することの不可能である爲に、人類がその増加を停止したとの小事実を知らざり。又、我々は、人類が、土地の生産物を、此の幾何級数的進歩に於て増産せらるる事が出来なくなつた時衰に立つていた事を直に感ぜず。この幾何級数的進歩といふことは生産物にとつても、人類にとつても一つの活動的を自然力であり、人間は、木下一度も之れを完全に消費しつくさざりのである。

以て起因する幾種は、マリスのいう所の、人口増加の障礙では有り、彼は、生産の不可能を前提としてゐるけれども、生産が氷解たかも知れず、農産物も損失も前提としてゐない。降雨の、早熟による收穫の全減は、翌年に於て穀物が、人間の出生数をほるかに凌駕する如き程度に收穫せられる事の不可能を証明するものではない。

しかし、生活手段は、之れを購入する手段は、より貧困なる階級に於て然如する。而して、此の事情が、マリスが人類の法則となす所あり、かの急激なる人口増加を妨げるものなりである。又之、富有階級並に、彼の多量と、彼の特権とが、全時代人の間に擅んじてゐる所の貴族にしては、食料の缺乏する事はなく、従つて、此の如く國家の特権階級に於ける人口増加の進歩に就ては、我々は信賴しうるわけである。

貴族は常に、十分の生活資料を所有してゐる。従つて、その子孫が極端の貧困に陥る  
まで、貴族は増加しなげればならぬ筈である。然るに、事實は、この正反對である。世界  
のどの國に於ても、旧族は、数世代の経過より既に絶滅するのを免る。又貴族は、絶へず  
新貴族はよつて、補充されてゐる。いつれの家長も、子供數の余りに多きことを、その高  
貴の家名を辱しゐるものとして、さげすむ。若干の家柄が、數ある分家に分たれる事柄が  
あるにしても、絶滅した家族の方がはるかに多い。ハイネリヒと四世の時代に生活してゐる  
家族の子孫は、その祖先の數程多くをりののである。この恰く知られる事實は、今日、絶  
へざる相續の如くに、その財産を十分に保護し得ない貴族が、貧窮となるといふ事柄に就て  
行はれる論議を鎮めるに足らざらう。モンモランシー族の起源はかく共、ユーゴーシヤ  
ペーまで廻り廻るが、此の名を稱す権利を有する人々が、ソブ礼も、十分の注意を以て、  
これを行使したであらうことには疑はれなからぬ。モンモランシー家は、ソブ礼か、パンに  
窮したることなく、マルサスの説の如く、生活手段の不足のため、その増加の停止した  
事は一度もなからぬ。故にその數は廿五年毎に二倍とならなければならぬ筈である。假りに最  
初の祖先が、紀元一〇〇〇の年頃に生存したとすれば、此の計算方法に従へば、一六〇〇年  
頃には、その子孫は、千六百七十七方七千二百十六人とならなければならぬ。しかし、

当時、フランスの全人口が、これだけの数には足りなかつたのである。この増加が、此の如き方法に於て、  
絶へず行はれたいすれば、地球全土、モンモランシーのみならず、げだし、その数は、一八〇三年には九億、  
四十七万四千五百五十六万四千八百八十八人に達するから、此の計算は戯れに如く見ざるが、一方に於て人類の自然的能力を  
考慮したとき、一家族の、可能的なる増大を明らかにし、他方に於て、常に人間の意志が、かかる増大に如何  
ある妨害を明らかにし、その妨害は食物の量と全く無関係であることとをいふに、その妨害は、他のすべての階級  
比し社会の最高階級を、即ち最もよく窮乏から防護せられてゐる階級を阻止するからである。——明らかにする爲  
には他に方法がないからである。

野蠻時代に於ては、人間は狩獵と、漁獲との收穫によつて生活する。魚と野獸とは人間と全く幾何級数的  
に増する。しかし、人間に於けると同じやうに、此の幾何級数的増加は、彼らの存在が一定の限度に達すると止むので  
ある。彼らと闘つた狩師は、又は、社会的立法とは無関係である。彼は、直接自らの意志によつて、此の如  
き、彼の生活状態に於て、自らの負担となる程に家族を増加することをせらるゝのである。狩師の所得は、彼らが  
屢々饑饉にさらされる如く不確定である。しかし、これは、人口の予測せられる増加の結果ではない。むしろ反  
對に彼らが、文明人と接觸するに至る途は、その人口は全く状態に止まるのである。而して、この接觸の瞬間から  
彼らは、その數に於て急激に減退するのをみるのである。

文明人と接觸するに至る途は、その人口は全く状態に止まるのである。而して、この接觸の瞬間から彼らは、その

数に於て急激に減退するの恐れがある。

文明の進歩に於て、牧畜生活が、狩獵民族の生活の次にはじまる。而して土地の自然的産物は、これを家政的に処理すれば、人間及び動物の遂に多数を養ふに十分である。印度のイロコイ族が五頭の獵犬を、漸く養ひつる所の單系は、恐らく、韃靼の牧人二万人と其の家畜全部とを養ふに足るのであらう。家畜の増加は常に人間の増加より遙に急激である。人間の増加は二十年を要するが、牛の増加は只五年を要し、羊は二年でよく、豚は二年で足りる。牛の数は六年間に、羊の数は四年間に二倍となる、而して、豚の数は二年間に十倍となる。若し、人の羊飼が皆て狩獵に使はれて、牧羊の土地を所有すれば、その羊群の増加は、常に着るしく、彼の家族の増加を凌駕するのであらう。

韃靼民族は寒帯生活の直后に於て、事変急速に増加する。しかし、韃靼人の家畜は、次して、韃靼草系の牧草全部を喰ふつくすことはない。此の單系に於ける個々の家族は、孤之のまゝに絶滅することもあらうし、他民族に接近すれば、これに従属するのであらう。故に、韃靼の家族にとこは、その中に支柱を見出すに十分の位に多数となる事が望まれないであり、事實又それを直ちに實現せしむるのであらう。而して、やがて彼等の好都合の一点に到達すれば、自り停止状態が出現するのである。アラビア、韃靼、カブール、或はスミトランドに於ける、牧畜民族に於ける如く、血統に関する誇りは、遺産及び家族の分割に及ぼす。若者はその種族の首長から分離するときは、自ら新

の草原を占められるであらう、しかし、彼らはむしろ酋長の下に止まって、結婚をし、あつたものである。習慣を全く  
先入見が、晩婚と低き出産率の原因である。あらゆる遊牧民族が、情熱を傾倒して戦争も、今孫に彼等の命を滅殺し  
た。遊牧生活は甚だ快適なものであり、その半牧の農夫であり半牧は牧人である所のアツガン  
民族に於ては、牧人が農耕生活に較べた例は行か、農夫が牧人になる事は極めて頻繁であるに不向、今は  
その家畜のため、その牧場を悉く食ひ盡すれば、その種族を知らなかりである。

遊牧民族を農耕に移らしめるのは、或はむしろ遊牧民族の移動を止め、土地に農耕民族を繁栄せしめ  
るよりは、確かに文明の進歩である。此の時期から起る人間は、植物界の自然的産物に於て頼る事を止め、

労働によつて、植物の生長を増加せしむるに至るのである。辛くも、純牧畜によつて、一家族を扶養し得た  
土地も、植物も、家畜との牧獲物によれば、三千家族を養ひ得るとされる。故に一民族は、遊牧生活から、農耕生  
活に移り、農耕生活に於て、事実、それか油用するもの、約三倍の土地を所産した事となる。若し、この民族が、

この土地を十人の耕作せし、又、高度の文明国に於て、多くを食ふ土地が、牧場として、使はれてゐるならば、これは  
人間の意思及びその立法が、土地の産出する生活手段と、土地より生産することを好むし、このことに起因するの  
である。

植物の増加は、動物のそれより、はるかに急激なる幾何級数的増加に於て行はれる。穀物に、普通の耕

依に於ては、年々五倍となり、馬鈴薯は今日期間に十倍となる。今二量の食料を獲得せざる爲に、馬鈴薯は穀物の必要とする土地の僅か十分の一を要求するにすぎぬのである。然るに、人口の最も稠密なる國に於ては、あらゆる穀物畑に馬鈴薯を植之、あらゆる牧場に穀物を植之、或はあらゆる森林を牧場とし、皆焼くを以て、一切の荒野を牧場とするにと就ては、皆成してゐるのである。これは、その國民に取つて置かざる準備であつて、一度、その意志が変化するならば、勿論、年々歳々驚くべき方法に於て、その生活手段を増加しようのである。而して、これは生殖のあらゆる可能なる進歩を、はるか凌駕するに適當せる幾何級数的増加に於て爲されるのである。國の意志が変化すれば、我々は認つたが、農業民族の意志は、その利益次第によつて、土地が与へる生活手段をば、生産したり、或は生産しなかりする権利を、土地の所有者に与へたのである。ソつた國に於ても、土地の所有者は、生活手段を要求した者が、之を、彼らの所得を以て購入し得ない限りは、決して、此生活手段を土地に持ち運ぶことを許さないのである。ソつたに於てこそ、人々が彼らに、幾んど悔ひ労働を求め、ある時は、只の市門の前は、彼らに労働と收穫を与へる所の、四十万人分の労働を容れうる土地を、未耕のまま放棄して置くことがある。自分の労働によつて、自己の生活手段以外の何物をも発生せしめ得なかつた所の日傭人は、土地所有者の何物をも与へ得ないとしても、それは、土地所有者が、何らの労働にも与へず、自己の土地から産出せしめ得る所のものより、常に僅少であつたであらう。かくて、労働は行はれず、生活手段は産出せられず、人口も増加するを得なかつたのである。けれど、所有を理想とする法律の中に表現せられてゐる國民意志の此の増加に反対しなかつたのである。

第四章 如何なる人口増加が一国民にとって希望すべきものであるか

土地の富の項目に於てすべて諸々の所があるが、若干の国々には、利用制度が、非常に圧制的であり、家族の誇りに因りて願慮が、公共の利益に及し、たゞに、よりよき文明に逆行する所の、土地所有者の行動は、今時に不公正あり、且つ非人間的であり、更に、所有権の設定せられる、所々(の目的)にも正に背馳してゐるのである。

しかし、一般的には、我々が念増加との關係に於て、缺陥あるものとして記述して置いた經濟組織は、障害としてよりも、より多く別致として影響を与へるのである。土地所有者は、屢々、許容するべき、生産的労働をも拒否するが、この許容に及らざる限、階級も確かに存在する。その土地の与へらる、すべての生活手段は、その土地から收穫し、存け此は存らた、従つて、最も相悪なる生活手段を以て満足するを要し、その予備資源を悉く耕作しなせられらす。従つて、不測の危急事態發生の場合に、最後の心算手段を所有し得らざ国民は、非常に不幸な国民といはねばならぬ。すべからんが、苦惱してある工業的労働者となる運命に陥り、その生命をも最も多く賃銀を提供するものに販賣せんと欲し、最大の労働を提供して、生命を漸く維持するに足る最小限度の生活手段を以て満足する、あらゆること、人間が相互に對立して爲しうる此の種の(生存)競争に對し、土地所有者は、社会の保護者となるのである。土地所有者が、万人に對する此の種な狂的な供給を不可能としてゐる事は、一つ幸福を抹すべからぬものである。然し、土地所有者として、その發生の社会にとって何らの利益とならざる人口を發生せ

め、且つ、此等種の階級に対しその所得と食料とに於て常に失望しなればならぬ事とを余儀なくせしめて居るは、恐らく、我が社会制度の最大の缺陷であらう。

國土の大部分が開墾せられてあり、農業労働に多くの賃銀を与へざる土地、唯田野の植物を以て獲れしむる、且つ開墾せられたる土地す少くも十分に耕作せられてあるはずとせしめ、又土地の施肥せらるることなく、澁地も排水せられず、丘陵も氾濫に対し保護せられず、田野も徹底的なる自然力に対し保護せられざる限りは、而してこれらすべてが、人々の欲念によつて主しはもつておれば、自己の労働によつて生活する開墾者や住民の幸福を以て土地耕作者の階級が増加し、彼らに所成する河の労働を實施しうる状態に置かれる事希望しなればならぬ、けれど、これによつて、彼らは甚く賃銀を得られるから。

工業生産物が、消費者にとつて減少してゐる限りは、或は消費者が、その価値を全然に例しかり犠牲に於て、工業製品を作りうるべきは、或は、消費者が、その必要とする家具や、襪衣や衣服を買ひ得るので、自ら粗末な法に於て家内工業を以て満足する事と余儀なくせられてゐる限りは、或は、彼の享樂が、彼が得く以て満足する事とする河象物の不満足によつて制限せられてゐる限りは、我々は工場人口の増加を希望しなればならぬ。けれど、彼現存する需要によつて、幸福に生活し得るし且つ他階級の享樂に専らしうる事があるからである。

かくて、一部の貧民が、農業の爲に、製造業の爲に或は、農業及び製造業に役員、商業の爲に必要である限り、



又、資本と労働とを等しく有用である防護能力の不足を分けてある限り、我々は不断に人口が増え、肉體  
秩序、人命財産の保証を改善し、健康の爲によりよく配慮し、國民の精神生活を豊かにし、之に光明を与  
へる事を希望しなければならぬ。更に又、人口の大部分を使用する所の陸軍や、海軍の配備を意味す  
るにしも、十分の権力を以て、社会を対外的に防護する事を希望しなければならぬ。

此の人口は、要求せられるとき、直ちに發生するであらう、しかし、この發生を以て、それらのものを必要とするその  
最近の場合に使用しうるといふ事の保証はならぬ。豊かな土地の近々に移住して、長らくの住居は、  
はその土地を利用するであらうという陣々の保証をもちへられる事なく、その土地は繁茂し、木柵壑の手、  
残りうるのである。この土地は、少数の家族の所有物となつて居り、それは不可分のもの、譲渡すべからざるもの  
のとして、告示されたものであり、それは、近代借地権や、抵当権の設置を許さず、嫡子権によつて、唯一  
の地主に移るべくのものである。然るに、地は、、生産的に使用するに必要とする資本を有する、而して、彼は  
その土地の使用を許す所の資本を有する人々に対し、何らの保証をも与へる事か出来ないのである。農企業

の安全を保証し得ない。如此、ローマの懶惰な住民は、空しく労働を求め、又是れたる村落は、空しく労働者を  
求めたのである。即ち、経済組織が、悪化するものである。この経済組織、変更せられ、其の限りは、労働者は、飢餓のため  
田畑の端に餓死するのである、田畑は、労働の故に、長らく原始の状態に復帰するであらう。即ち、人口は増  
加し、其の減退するであらう。

公採ト、ポリランドヤ、ハンガリーヤ、ロシヤの富裕なる地は、空しく、半工業者の生産する贅沢品を希と  
求するところの、遠隔輸送を爲し得らざる所の粗悪な道路は、徒らに国民的工業により高價の運路を与ふるのサ  
てあり。圧制と奴隸制度とは下層階級に於ける一切の緊張力、あらゆる企業的精神を破壊するてあり  
う。他方、於て、破壊的なる独占、嫌忌する特権、絶望的なる採取、無智、野蠻の公衆の欺如く、手  
工的工業の進歩を不可能ならしめ、如何なる資本も之れを運轉せしむる爲に高價の運路を以てあらう。  
又人口の増大も、工業の発展に導かず、生産数は一定期間に於て、寧ろ、一倍となり、四倍となり、命も、天は其  
働者の増加とならず、むしろ、急激なる死亡率の増加を結果せしむるてあり。此ら経済組織の悪るるの  
ある、之れが衰華せらるる限り、人口は増加しなごあらう。

防衛人口(兵)は、他の諸階級によつて、亦も、それ等の階級が主として扶養されるのである。社会が  
数の防衛者を肩するが爲めには、多数の子供を産むては、又、其の力である。若し、その父親のかなりな幸  
福状態を生活して、いよいよならば、父親は決してその子供に相当の教育を授け、その子供は、いよいよ主  
は決して彼らの中から、いよいよ兵卒を供し、いよいよ事は出来ぬとあらう。然るに、その教育の海上の島嶼は、人口と  
濫費し、いよいよはならぬが、及之によつて、経済組織は、過剰の人力を、利用しうるのである。

人口は、その窮乏の尺度を、労働に對する需要に於てもあらうである。労働が需要され、而して、労働者  
に十分の賃銀が与へられるならば、労働者は、之れを一度得て、其の産出せられるであらう。

人七は 自ら伸張せんとする自國有の能力によつて未だ出奔せらるる過剰生産を常に占  
めんとするであらう。今じように、生活手段も労働者のために発生するであらう。或は、  
必要の場合には輸入せらるるであらう。一人の人間を生活せしむるところの必要は、此の人間  
間のために生活手段を生産する所の農業労働に對しても酬ゆるであらう。労働に對する需  
要が消滅すれば、労働者は滅亡するであらう。しかし、夫れその労働者のために苦痛を与へ  
るものではなく、その仲間とその競争者とは悉く、彼れと共に憐む所の闘争の後に滅亡す  
るであらう。彼に對し、その生命を維持してソレ所の、而して、今は既に彼の購買し得な  
る。従て、彼の要求し得ない所の、生活手段は、最早や、生産されることを中止せらるるに  
至らざらう。即ち、人民の幸福は、労働に對する需要、就中、規則的且つ継続的なる需  
要と一致する。けれど、一つの労働が、労働者を依り上げれば、在々にして頓挫すると  
此れは、労働者を苦惱と死とに至らしめるものに他ならぬから、此の如き場合には、労働  
者は、初めから、生れなかつた方がよかつたであらう。

或は、生産が喚起する所の労働需要は、消費の手段を与へる所の所得と釣合はるべきも  
のであり、所得は、国富から生ずるものであり、而して、国富は、労働によつて形成せり  
此且つ蓄積せらるるものがあることを見た、かくて、経済學に於ては、一功が相互に関連

もてゐるが、我々は常に一個の円周を回転してゐることになるのである。けれど、結果として  
それ自体が原因となるからである。此の円周に於ける、すべての存在は、その各運動が、  
相互に比例を保持するように、漸次に相関連して動かすなりぬ。若し相互に結合さ  
れるを要するこれら運動の何れか一つが、その従順さを拒絶するならば、一切のものが停  
止状態に陥り、すべてがもろが退歩する。事物の自然的運行に於ては、富の増加によつて  
所得の増加が生じ所得の増加によつて消費が増大し、且つ、再生産のための労働の増加が、  
又これと共に人口を増大をもきたすのである。此の新しき労働は、それ自ら又富を増大を  
きたせしむるであらう。しかし、不公正なる政策によつてこれら運動の何れかに圧迫を  
加へて他のすべてを顧みざる事を行はば、全組織の秩序を乱し、又國民の爲に福祉を圖り  
つゝ、甚りと痛むなかり却て國民に甚しい痛苦を与へることとなる。

社会の目的は、この社会が所有する所の土地が、新しき人口を扶養し、且つ、之等を幸  
福に豊富のうちに生活せしめる手段を提供し、之れが利用せられるに至らざれば、達成され  
ないものである。この地上に、幸福を致すすることは、一切の創造物に刻印され、神意の  
目的であつた。人間及び、人間社会の義務は、此の目的に添ふ事に在る。

その臣民に圧制を与へる事により、法律と秩序とを監視する事により、農業と工業との  
調和を導く、妨害により、豊沃の国土を荒廢に委せしむる政府は、長らく自己の臣民に

對して 罪惡を犯してゐるの如きならず、その暴虐は、人間社會に對する一つの犯罪であ  
り、之れに對し全体的苦痛を與へるものである。此の如き政府は自國の國土に對する自ら  
の權利を、もつて取つたものであり、他の諸國民の幸福を破壊するが故に、これら諸國民に  
干渉の權利を與へるものである。ヨーロッパ人は、單に、バルベレスクの海賊か、ヨーロッパ  
人々に對し、攻撃したといふ理由によつて、彼らの掠奪行為の責任を同様の權利を有する  
人々になく、その貿易がヨーロッパのために必要とせられる所を國土を彼らが荒廢せしめ  
るからであり、この國土の自由と安全と、農耕と通商と、人口を破壊するの故を以て然  
るべきである。ヨーロッパは、非常に幸福なものである。生産物を、ヨーロッパと交換する  
を得た。これらに採られたる地域は、アフリカの島と森林に、此らに地域が再び、ハドリア  
ック時代が如く、ヨーロッパ製造工業の過剰生産物の爲りの一大市場となり得れば、そこに  
是れ生活手段の爲めの巨大なる補助資を發見する事となるのである。アルジェール首長や  
モロッコ王の専政は、たゞにアフリカに於て感ぜられるべきでなく、その及ぶ動は、我々  
の全工場に於ても感ぜられる。

今日人は、眞理を實際に就て絶えず遠ざからんとする原則を樹立する事を得意とし  
てゐる。自由の友人である國志學者は如何なる國民と雖も、他國の専政に干渉する權利

を許せしむる國民に於ける政府の悪政は如何に乱逆なるものであるにせよ、他國民に干渉  
排を許すむるは、たゞその政府の他國民に対する行動のみであると言張してゐる。善であり  
る所の、人類相互の交換の欲望と之の交換関係の断絶によつて生ずる悪とは、暴君に對  
して、遂に有利にして、自由の國民に甚しく不利なる、この原則の虚偽である事を罰する  
のである。わが國民が怒り、ある懲罰を基礎として、隣國民が、自然の贈物に就て行ひ  
つゝある濫用を調査する権利を有するるのである。彼ら法學者は、財産に対する尊敬の不正  
なる適用を、主権の上に拡大したのである。しかし、財産の諸制度は、それ自体一つの經  
済的契約の結果であり、公共権力と、規則的行政の下に立つ社會に在つては、万人の利益  
のために生産するといふ各人の利益の基礎の上に立つべきとが出来るし、又此の私的利益が  
概に走るときは、必要に応じて、公共権力によつて制限することも出来るからである。及  
之、互に独立せる諸民族の間に成立する人なる人類社會に在つては、各主権者の情熱を制  
限しうる、何らの法律もなく、何らの政府的権力も存しない。此の主権者の利益は、その  
臣民の夫れを一致しなり、又暴虐の維持に向するものであるときは、常に利益は相及する  
のである。バルバライド(アフリカ諸國モロッコ、アルゼリー、チニス、トリポリ)に於けるバルバレイ  
ク人の所有権を無制限とする場合に於てすら、支配者に隷屬する人民の上に成立すると主

しかし、人間の居住する地土の四分の三以上は、その年の政府の残りによって、その土地の扶養しようとする住民を養つてゐる。然るに、他方、ヨーロッパの多数の地域は、その土地と人口の困難な状況に脅威せられてゐる。内戦、労働に付する需要の割合を凌駕する過多の人口を維持しなければならぬのであり、彼らが、困苦の前にたゞおくれ前に、自己の労働によつて生活する階級をば、その苦境に与らしめねばならぬのである。此の苦境が、さういふところから起る処に於て、たゞその労働によつてのみは満足しようとする過剰の資本から空しく労働が供給されて居り、彼らば、その購買し得ない過剰なる生産手段の眞只中に會つて、うちに七か八か人としてゐるが如きあり、此の如き不均衡の責を負はねばならぬ。これは、たゞ我々の法律であり、その施設である。我々の政府は、不透明なる性急さによつて、自然の樹立したる均衡を破壊したものである。宗教と立法と、経済組織とは、社会の需要に順応せざるべきを発生せしむるに努めてゐる。と同時に、富の蓄積をその目的として、人類の幸福の創造を意圖しなかつた立憲者は、一つの仕事の遂行に必要な人間の労働量を節約することに努力したりである。消費が甚だしく制限せられて、それゆゑ市場が在庫で充満してゐるときに於てすら、政府は、全体の熱心を経て、生産の増加に努力し、而も他

一方に於て、至るべきもの、必要とせられたる人は、減少して行つた力がある。かくて、各種の相互に結合關係に立つ、社会的進歩の円滑は中断せられた。吾輩は極大の此力がある。

林 囑 託



新編 五十年の歴史を振り返る

「ラスカナル農業 観」(一七八)、「商業的富」一名「経済学原理の商業と法の志用」(一八〇三)

等は、完全に、スミスの教説を地盤としてゐるものであり、しかし、後期に着眼する「経済学研究」に於ては、むしろ、スミスに対する批判者として現はれてゐる。

彼をして、かゝる心意の変化を行はしめたものは、外方リカアト及びマルサスとして、非観的意見に到達せしめたといふ事柄、即ち、工場生産の進展に伴う、労働者階級の貧困の増大と、当時、英國を中心として、大陸諸國を歴々襲つた、経済恐慌の深刻なる惨害の影響を觀察した事によるものと思はれる。即ち、生産は増大してゐるに不拘、却つて、国民大衆中労働者階級の福祉は打つて、減少してゐる事實に対して、彼は常に懐疑的たりざるを得なかつたのであらう。換言すれば彼の、自由主義経済学に対するに至つたものは、一般的な人文哲學的の熟慮、若しくは、個人、社会及び國家に対する別個の思想に生長しようよりは、むしろ、現実に経験したる、労働者階級の貧困に対し彼が常に懐ソミいたところの、温かい、人間的な感覺からなつたといへる、而も愈まで、批判的であつた彼が

現存社会の弊害を發見するより、満足せよ、愛にその缺陷の根源を、社会制度のうちに見

るもの、温かい、人間的な感覺からなつたといへる、而も愈まで、批判的であつた彼が

現存社会の弊害を發見するより、満足せよ、愛にその缺陷の根源を、社会制度のうちに見

るもの、温かい、人間的な感覺からなつたといへる、而も愈まで、批判的であつた彼が

現存社会の弊害を發見するより、満足せよ、愛にその缺陷の根源を、社会制度のうちに見

るもの、温かい、人間的な感覺からなつたといへる、而も愈まで、批判的であつた彼が

現存社会の弊害を發見するより、満足せよ、愛にその缺陷の根源を、社会制度のうちに見

出づることにして自然である。

ミズエンデイは、古典経済学を以て、單に抽象的、演繹的に、富の研究を事とし、生産物の蓄積の力を考へて、之れが公正な分配を考へざるものなるから、一つの「預言」にすぎぬとし、之れは結局、富の目的と手段とを顛倒せるものであるから、之に代るに國民の福祉の研究を、生産物の増殖の理論に代へるに、取の公正なる分配の理論を以てしなげればならぬ、即ち、國民の富は、國民を構成する所の人間の總体の福祉を追求するものと、假令これに、すべての市民を物質的に生活に参与させること、別して、人口中の多数を形成するところの貧民に最低限度の幸福を保證する如く分配をなせばならぬとするものである。

此の如く、ミズエンデイに於ては、分配論が、その体系の前景に押し出されるのである。か、國民の最大多数の最大幸福は、ミズエンデイが教へたやうな、自由放任によつては、決して達成せられぬものではなく、各方面、各分野に於ける利益の対立は、ミズエンデイの介りなきもの、國民の干渉を必要とする事によつて、従之する平衡を依り出さんとする努力は、下つてのみ、達成されるものと考へるべきである。即ち國家の職能は、正義を以て支配せしめ、國民の福祉を汎存せしむるに在るとする。國家は、個人の一時的で熱情的な利益に

對比して、總体ヲ持續的にし、冷靜ヲ利害ノ代表者ト見做すのである。

自由放任經濟學に對して批判的なる彼は、經濟の循環に於ける、生産と消費との均衡が

無政府的なる商品生産が及配的なる社會に於ては如何に實現困難なるものかあるかを以て

實社會に於て、各階級若しくは各個人の消費の限界と現實に現出するものは、その欲望で

はなく、正しく、その材料である。この所得、詳言すれば、社會所得の年々り分配は

彼の經濟學的概念の變遷となるのである。彼の分配論に於て、丁度早くも、余剰価値が

指摘されてゐることは注目し得る。而して、土地、資本と共に生産の三要素を以て、労働

こそは、自らの価値以上のものを生産する能力を有し、彼は之の余剰を、労働の利益と、時

人長りであるか、之れは持つて、労働者に帰属せしめて、利益及地代を形爲て、企業者と

地主の手に歸するのである。かくて、所得とは、富者の手に歸属するものが余剰価値に、勞

働の価値、換言すれば、労働者の生産資料即ち、金づく富者の資本の一部と交換せし

る事によつてのみ換得され、且つこの資本の部分を限度とする所の価値を計算したものを

採し、之れが、新たな年度の生産と交換される。而して、各人の消費の限度なるものは、こ

の消費の限度に合致するものと決定され、その所得の外ならぬ。かくて、所得が、当該年度

の社会予算に、消費をして、常態的且つ規則的によつて年度の生産と消費との間に

その社会の均衡状態が保たれる。即ち、前年度の生産に等しい再生産を成るべきである。その再生産は再生産の一か所得を生現させ、且つその所得の分配にして依然全一であるとするは、依然として新たな生産に對する限度たりうるのである。これが富にも、人口にも、増減を伴ない、持続的な生産に對した、完全な均衡である。

然るに、生産方法若しくは、労働力生産力の改善によつて、当該年度の生産が増大するときは、所得とその分配にして依然全一であるときは、全一の所得が、より多くなり生産物と交換されることとなり、その増加分の一部分は富者の享樂に役立ち、他の一部分は再生産に注入され、工具、原料、生活資料等の形で新たな労働を扶養する事になり、遂に人口の増加を促す。かくる状態が、経済の自然的秩序に接続する所の常態的の進歩である。

更に近代社会に於て、如何にして、この生産と消費との均衡が破れるかに就ては、彼は生産が依然全一であるとするれば消費に熟習するような所得の分配に於ける變化こそは、実にこの均衡を破るものである。説く、近代生産に於ける利潤追求は、固定資本を増大に、よつて、人間労働の排除を行ふという支配的の傾向を有するものであるが、その結果、労働

階級の所得の減少を妨げるに至れば、直ちに、その消費に反映し、件の均衡を破壊せずには置かぬのである。

彼は、更に商業的な富、即ち、商品生産を論じて、消費不足としての恐慌理論を展開するものである。即ち、近代の高度な企業組織と熾烈な自由競争の支配下に於ては、企業者は、絶えず、見乏する顧客と相対し、他の生産者より一層低廉な費用で生産しうるために、絶えず、労働者の賃金を低下し、又機械の応用によつて多数の労働者が失業し、延びて労働階級の、資産物並ひに低級な工業製品に對する購買力は、減少し、商品生産は、その敗路の一大部分を蒙失するに至る。而して、絶えず増大する資本家の所得は、新たに資本を形成し、一層生産を拡張して、恐慌にまで發展する所の一般的な生産過剩を生ぜしめると考へるのである。

以上、ミヌンテイリ経済學說を概観した力であるが、すでに、その、機械の応用、恐慌方面問題の説明に於ても、明白に看取せらるる如く、彼も亦、マルサスと全稱に、単に、人の過剰の問題を顧慮しては、ない、絶えず社会的な考察方法をとる彼は、國窮の要因を、人口と、生活資料との余裕とを同様に看做する闘争の中に求める所の、マルサスの論は、自ら

人の過剰の問題を顧慮しては、ない、絶えず社会的な考察方法をとる彼は、國窮の要因を、人口と、生活資料との余裕とを同様に看做する闘争の中に求める所の、マルサスの論は、自ら

歴史的・法律的な社会制度の事實のうちに求むべきであり、従つて歴史の各時代はソレも  
も、それに固有の人口問題を具有する筈であつた。従つて、マルサスの問題は余りに抽象  
的に取扱つた事を非難して、人間の如何なる行為に於ても、我々は、能力を意志と混合し  
てはならぬ、人類の増加はその意志に依存し、従つて、そのうちに、その限界を持つて  
いると見せ、マルサスの自然主義的な人口理論に対し、或は、主義主義的な人口理論  
を討論せられたのである。彼によれば、人口の増殖に対する規定的なる要素は、現存り生活  
資料の分量ではなく、何となれば、動植物の増殖は抽象的に論ずれば、人類の増殖下り  
も是か一層急速である——むしろ、本質的に、労働に対する需要によつて決定されるこ  
ころの所得である。此れ如く、人口を制約するものか所得であると言ふるとき、しかば、  
このことは、人口過剰を促進するものか、常に、人口中極めて、僅かなる所得を得るもの  
階層であるという事實と矛盾するのであるか。シスモンディは、むしろ、實にこの階層が  
近代の工業生産のもとにあつて、絶へず、さらさらしている生活基と、その絶望感とか、貧  
者をして、その財産を奪はれ、は奪はれる程、彼らは益々その所得に就て困惑し労働需要  
とは、何らの比例を保たず、従つて、生活資料を缺くところり人口の増殖に寄与する危険  
に陥ると説くのである。即ち、人口の過大なる増加は、社会的な困窮の原因ではなく、そ  
の結果であるところりである。

林 誠 著